

空



2013・12

SORA 52号

福岡 栗原京子

猪が人の数越え鳥しづか

荒れし様たがひに語る野分あと

占ひの露店は隅に放生会

踊子の白き腕が袂より

時雨来て軒に雀や薬缶沸く

東京 山田正子

パンの耳あげる約束小鳥来る

白菜割る相思の仲を裂くやうに

塀の穴覗き食べ頃次郎柿

天高し馬の墓標は石一つ

唐辛子人の少なき村となり

山梨 野畑さゆり

天守閣なき城址や秋澄めり

小海線急カーブして谿紅葉

玄海の藻塩の欲しや衣被

石蹴りて一人帰る児みのこづち

どてつぽふの声鎮まれり冬隣

千葉 原友子

秋遍路中のひとりの笠深く

秋しぐれ茶碗蒸しよりいただきぬ

内輪もめありしごとくに茸かな

解脱てふ色かとおもふ返り花

納屋の扉の秘密めきたる星月夜

大阪 田岡千章

二百十日をとこが丸き握り飯
さやけしや着付師帯をぽんと打つ
盆の月膝に赤子や死者を抱き
星月夜人魚が溺れみたりけり
シースルーエレベーターの良夜かな

福岡 田代貞枝

阿蘇五岳背に千疊の蕎麦の花
五岳より下り来る風にそばの花
秋燕の飛び立つ後振り向かず
夫の臥す窓に小鳥の来りけり
托鉢の僧の錫杖初しぐれ

福岡 樋口みのぶ

春雨や庭に亀石鶴の石
あたたかや目の神様は目の太く
振り向けば写楽の目して春の猫
夏服の型紙むかし新聞紙
夕月や鍋に杓子の添へられて

福岡 吉村 摂護

鳴らしみる新調の杖秋しぐれ
新涼や膝をそろふる送迎車
天高くデイサービスに追はれけり
無患子や煙のうすき火葬の火
十月や遠流の鳥は波押へ

東京 古川 夏子

やっちや場の跡や草の穂草の花

今むかし小塚原の大毛蓼

笹笛の風音となり赤とんぼ

稲光無人で回る観覧車

縄文の海の色あり山葡萄



空作品評

柴田佐知子

柿熟るる誰も通らぬ道となり

高倉 和子

新しい道ができたのか、あるいは過疎化が進んだのか。時折、熟柿が落ちる音がするだけかもしれない。郷愁に似た思いを誘う静かな作品である。

文化の日この世に誓ふこととなし だいじみどり

「誓う」という言葉には若々しいイメージがある。友と、あるいは自らに誓うことは齢を加えることに少なくなるように思う。愛を誓うなど尚更だ。しかしこの句の根底にはもつと深い淵のようなものを感じる。すべてこの世はかりそめ、誓うほどのものはないと。この無常観をかるくいなすように「文化の日」が上五に据えられている。

生き延びて細る手足や秋気澄む

山内 碧

病気をすれば大方の人は痩せる。それを句にして

も、まあそうでしょうね……といった作品になりやすい。しかし掲句は「生き延びて」という切り出しによつて「細る手足」の具象化が際立ってくる。透明感のある見事な表現である。この内容を受ける下五の「秋気澄む」の静かさが心にしみる。

新藁をくるりと束ね象の鼻

秋 千晴

何の説明も要さない分かりやすい作品。象の姿がくつきりと見える。素直な目と素直な表現によつて得られた好感のもてる作品である。新藁の句としても珍しい。

誰も居ぬレントゲン室冬に入る 高倉恵美子

レントゲンを撮るとき、レントゲン技師も室外へ去る。確かに自分以外には誰も居なくなる。しかし私はこの当然の景を句にするなど考えたことがなかった。俳句は日々の生活の中にある。この句を読んで、丁寧にも身を詠んでゆきたいとあらためて思った。
(以下略)

空作品抄
柴田佐知子抽出

柿熟るる誰も通らぬ道となり

合掌の屋根に誘はれ走り蕎麦

秋彼岸四隅の乾く四手網

仏足石かこむ億万草の露

満月や横顔ばかり過ぐる汽車

文化の日この世に誓ふことのなし

貧しきころの記憶は楽しちちろ虫

生き伸びて細る手足や秋気澄む

冷まじや人なき家の草の丈

虫籠を終の住み処として鳴けり

退院の間近き母の蒲団干す

蓮の露落とさぬほどの風渡る

高倉和子

中田みなみ

荒井千佐代

服部早苗

柴田志津子

だいじみどり

野上 杏

山内 碧

宮井知英

松田明子

小林朱夏

長 憲一



長き爪山車をはみ出すねぶたかな

木の葉髪傷痍軍人絶えんとす

新藁をくるりと束ね象の鼻

指先に神を降ろしぬ夜の神楽

誰も居ぬレントゲン室冬に入る

一位の実昼はしづもる相撲部屋

オルゴール秋日にことば置くやうに

川音の折り折り変はる九月かな

秋時雨看護師の語尾やはらかし

鳥の飛ぶ青き空ごと地球浮く

猪が人の数越え島しづか

天高し馬の墓標は石一つ

解脱てふ色かとおもふ返り花

夫の臥す窓に小鳥の来りけり

あたたかや目の神様は目の太く

鳴らしみる新調の杖秋しぐれ

吉田 菫

鳳 蛮華

秋 千晴

あさなが捷

高倉恵美子

苑 実耶

矢野百合子

亀井紀子

今井春生

青木朋子

栗原京予

山田正子

原 友子

田代貞枝

樋口みのぶ

吉村撰護

見得を切る太刀の先まで村芝居

いつさいは秋夕焼の中にある

冬菜畑夜来て遊ぶ鳥けもの

帰省子に引きあはせたる子豚かな

鳥葬の供華ならば白まんじゆさげ

青簾はづし此の世の人となる

ひと啼きに百羽呼び寄す雁の長

鯉の背の光りつつ寄る秋祭

そぞろ寒女医はパソコンばかり見て

することもなくて湯宿の萩こぼる

一行のかりがねの声わたりけり

海峡の紺を渡れる草の絮

畦道は寧し蝗が蹠に

鶏頭は泣き止まぬ子の味方かな

幾重にも雲の降りくる刈田かな

一刷毛の雲の純白秋高し

布団屋が禰宜の姿に秋祭

松田明子

戸栗末廣

宮井知英

織田高暢

天谷翔子

長節子

押田裕見子

田邊豊子

池田華甲

白水良子

森俊人

井浦美佐子

田岡千章

仲里奈央

清水量子

小川涼

酒井みち子



朴の実やげんこつほどの石仏
とりこはす蔵に大白雁わたし
新涼のハミングに家事片付きぬ
平凡を厭ふ抜け道ぬのこづち
墓石にこつんこつんと鶏頭花
脚立から地下足袋伸びて松手入
冬たんぽぽ牧羊犬になつかれて
稜線のたしかなうねり秋澄めり
泣き足りぬ子は秋昼を蹴つてゐる
木の实降る些細なことは忘るべし
夫ありてこそその平穩冬に入る
母の忌を迎へし月の暈かな
月天心覚めて孤独のまぎれなし
子が庭の剪定をする敬老日
更衣この世の名残り少し捨つ
敬老会いつも軍歌を歌ふ人
てつぺんに城の跡ある紅葉山

吉川夏子
野畑さゆり
石川叔子
橋本知笑
林徹也
井手本恭子
えとう樹里
遠山のり子
乾有杏
今井春生
伊東孝子
上川うえかわいつ子
山口弘子
ふじの茜
片田きく
井上義郎
松岡凌

空集

柴田佐知子選



どうみても黒衣の目立つ村芝居

地芝居のはねて舞台の月おろす

地芝居の土産にもらふ山のもの

月明やたつぷりと振る育毛剤

囲む掌は心のかたち小鳥来る

妻の用とうに忘れて菜虫とる

未枯るるものみな空に触れてをり

水音に風音まじる秋の蛇

いつさいは秋夕焼の中にあり

やすやすと齡を加へ初秋刀魚

遠山の更に遠のく吾亦紅

放心の色となりたる酔芙蓉

花びらのやうに吹かれて秋の蝶

夕星や熟れたる柿のほの温し

手の届きさうな青空芙蓉の実

冬菜畑夜来て遊ぶ鳥けもの

無人駅に幟立つ日や村芝居

接待のさなか幕開く村芝居

見得を切る太刀の先まで村芝居

悪役の顔になりきる村芝居

熊本 松田明子

兵庫 戸栗末廣

糸田 宮井知英

人集り割つて神輿の現るる

粕屋 吉田 葎

東京のタクシー迷ふ山紅葉

村祭背広の皺の落ち着かず

野分あと山に高さのもどりけり

泣相撲上がる前から大泣きす

犬の亡き裏庭広し上り月

粕屋 秋 千晴

秋風や古地図どほりに川曲る

野良猫のすごみきかせて冬の月

薄紅葉指に寄り来る魚の口

奈良の鹿集合写真に加はりし

兄弟は最初の異性草の花

首伸ばし掲示の紙を鹿が食む

秋立つや店先飾る稚児衣裳

福岡 柴田志津子

紋付に櫛目正しく炉を開く

幣変へて放生会待つ木の神馬

耳遠き父に集まる炬燵かな

秋潮に神輿洗ひの鐘太鼓

鳥葬の供華ならば白まんじゆさげ 京都 天谷翔子

献灯に知事の名もあり秋まつり

石段の日だまりに座し秋祭

老禰宜の馬上ゆるがぬ月の渡御

銀杏を洗ふホースの脈打てる

稚児武者の家紋由々しき放生会

血のつきし葉も混じりたる芒原

徹ぬぐふ指先やはらかくなりぬ

兵庫 織田高暢

浅瀬にすすぎて秋の遍路かな

帰省子に引きあはせたる子豚かな

袖で柿ぬぐうて父祖の地は遠し

いつまでも波音月の浮御堂

腹見せて鯉跳ね上がる放生会

福岡 天野百合子

ゴムほどの弾力菜虫つまみけり

水笛が水笛を追ふ放生会